

訪問介護員養成研修受講生の職業アイデンティティに関する調査研究

Investigation Research on Professional Identity of Participants
of Home Helper Training

土切ゆかり 岩田 香織

Yukari Tsuchikiri Kaori Iwata

I 問題の所在と研究目的

訪問介護員（以下ホームヘルパーとする※）の「質」と「量」をともに確保しようという課題は、介護保険制度施行後ますますその解決が求められているところである。さらに、障害者自らがサービス内容を選び契約する介護保険制度の考え方を取り入れた「支援費制度」においても、在宅生活の実現、あるいは維持の要としてホームヘルプサービスは非常に重要視されるとともに、重大な問題のひとつとなっている。支援費制度導入を目前にした平成15年1月には、厚生労働省で一ヶ月あたりの上限設定が検討された経緯もあり¹⁾、障害者団体等、当事者は強い危惧感を抱き、大きな抗議行動に発展したことは記憶に新しい。

介護保険法では、訪問介護は「介護福祉士その他政令で定める者」が行うと規定されており（第7条6項）、ホームヘルプサービスには「介護福祉士」有資格者、もしくは「訪問介護養成研修の課程を修了した者」が従事することがうたわれている。

これは、訪問介護（以下ホームヘルプサービスとする※）の質をこうした規定によって担保しようとする意図の表れと考えられる。訪問介護員養成研修の受講が義務づけられたことにより、ホームヘルプサービスに必要な介護の知識、技術等を習得する機会を確保しようというわけである。

そこで、現行の訪問介護員養成研修（ホームヘルパー養成研修）が実際に、一定のスキルを身につけたホームヘルパーの創出という機能、役割を果たしているかという点が重要になる。

筆者は平成13年度に訪問介護員養成研修2級課程受講者の研修の理解と、介護意識に関する調査を行った。²⁾ その結果、研修終了時にほとんどの受講者は研修に満足しており、研修内容の各分野に対する主観的理解度は高かったが、その後のホームヘルプサービスについては、その活動開始時期、態度を保留しており、研修の受講が必ずしもホームヘルパーとしての積極的なサービス提供に結びついていない傾向を指摘した。

また、2級課程の受講者に、どのようなサービス内容を希望するかについて、研修開講時と終了時に同一のアンケートを実施した結果、有意な差はみられなかった。受講者は研修終了時にホームヘルプサービスの必要性、重要性を理解したしながら、その一方で重介護や障害者介護を敬遠する、或いは家事援助を希望する理由として主婦業の延長と捉えているといった回

答がみられた。

こうした調査結果から、訪問介護員養成研修が受講者に対して、積極的、主体的にホームヘルプサービスに取り組むという姿勢の涵養、また介護サービスに対する価値観や意識の変容という効果を十分にあげていないのではないかという疑問を感じた。

養成研修の目的は介護の知識、技術を習得したホームヘルパーの輩出にある。受講者が研修の受講に達成感、満足感を得ても、そのことがホームヘルプサービスの必要性や重要性の総論的な理解に止まり、習得した介護の知識、技術が実践的な活動、即ち実際のホームヘルプサービスに活かされないのであれば、養成研修が十分その役割を果たし得ているとは言えないであろう。

そこで、以上のような実態を踏まえ、養成研修の成果を受講者の「ホームヘルプサービス」や「介護」に関する興味、関心、学習意欲等の個人的な満足にとどめず、職業選択に至る認識の社会化、職業的自己同一性（アイデンティティ）の獲得という側面からも考察することを目的として調査研究を実施した。

前述の通り、2級課程の受講者については、研修の前後において就業等に関する有意な意識変化がみられなかったため、1年以上のホームヘルパーとしての活動経験を有する者を対象とした1級課程の受講者と比較することで、訪問介護員養成研修受講と職業アイデンティティの関係について調査することとした。

訪問介護員養成研修の特質は、「訪問介護（ホームヘルプサービス）」に特化した専門研修という点である。その意味での研修の受講は、ホームヘルプサービスに従事するための職業的準備にあてられるものと考えられる。研修が特定の職業、ホームヘルプサービスを前提にしていることを、受講者自身、事前に認識した上で、自ら受講を決定しており、その意味で受講は職業選択に準ずるものといえる。

本研究では、ホームヘルパーの専門職としての確立、職業的社会化が必要であるとの観点から、養成研修の受講を職業的準備と位置づけ、研修受講者の職業アイデンティティに関する調査研究を行うこととした。主に、職業アイデンティティの構造を明確化するための質問調査を実施した。

こうしたアイデンティティーやその発達については、看護学生や看護師、歯科衛生士等の専門職について多くの先行研究が存在し、職業に対する認識の変容や、学習意欲や関心が教育、養成を通じて社会化していく過程などが報告されている。^{3) 4) 5) 6) 7)}

また、職業アイデンティティーの問題を、青年期の発達課題としての自我同一性達成との関連で考察した研究もみられる。^{8) 9) 10)}

しかし、ホームヘルパーを対象にしたものについては、就業意識に関する調査が散見される他はいまだ職業的社会化を一貫して考察した研究がみられないのが現状である。これは比較的簡便に用いることのできる職業アイデンティティ尺度が確立していないことにも因ると考えられる。その意味で、本研究において職業アイデンティティについてその構造を探るとともに、養成研修との関連で考察することは意義があると考える。

今回は、受講者の年齢層を勘案し、青年期自我同一性との関連を持ち込むことはなじまないと判断し、主として看護学生、看護師を対象にした調査で用いられた職業アイデンティティに関する質問項目に基づいて調査、検討を行った。

- ※ 介護保険制度における呼称は「訪問介護員」であるが、厚生労働省「訪問介護員養成研修テキスト作成指針」での介護保険制度以外のカリキュラム上の表記等が「ホームヘルパー」で統一されていること、および一般的な使用頻度、定着度を勘案し、本論文中では原則的にホームヘルパー、ホームヘルプサービスを使用する。

II 研究方法

① 調査対象

K市在宅福祉公社の実施する訪問介護員養成研修の平成13年度、平成14年度の1級課程受講者合計120名を対象に調査を実施した。

受講者は、2級課程修了者で、終了後1年以上のホームヘルパー活動の経験を有する者とされており、原則としてK市内居宅サービス事業者に所属するホームヘルパーが対象となっている。

また比較群として同じくK市在宅福祉公社の実施する訪問介護員養成研修2級課程平成13年度受講者159名を対象に調査を行った。

養成研修の運営方法は、地域や主催者により多様であり、本研究の対象者が必ずしも養成研修受講生の全体像を代表しているとは明言できない。

しかし、平成8年度より実施されているホームヘルパー養成研修新カリキュラムにある研修の目的、受講者対象に則っていること、対面式の講義、実技、および実習が実施されており、受講者が研修に対する所属意識を比較的維持しやすいこと等の点から、調査対象として大きな逸脱はないと判断した。

② 調査方法

研修閉校時に質問紙を配布し、受講者が自記式によって回答を記入後、研修担当職員に提出するという方法を採った。一部受講者は持ち帰り、後日調査者宛に郵送した。

1級過程受講者120名中回答者は114名であり、回収率は95%であった。

2級過程受講者159名中回答者は154名であり、回答率は96.8%であった。

③ 調査項目

主として日本の先行研究のうち1) 比較的簡単に用いることができる尺度であること、2) 現在既に専門職に従事している者と、その養成課程にある者を比較検討してその発達的变化を考察した実績があること、3) ホームヘルパーを対象にした場合でも齟齬が生じないこと、を勘案して25の質問を作成した。(質問項目参照)

それぞれの質問に対して、「5. 非常にそう思う」、「4. そう思う」、「3. どちらともいえない」、「2. そう思わない」、「1. 絶対そう思わない」の5件法によって評価を求めた。

質問項目は1級受講者、2級受講者に対し同一のものを用いた。

④ 分析の手続き

職業アイデンティティーの構造を明確化するために、因子分析による解釈を行った。その手続きは、統計ソフトSPSSを用いて1級過程受講者の結果について1) 因子抽出法の決定、2) 因子数の決定、3) 回転法の決定、4) 因子名の検討、5) 因子負荷及び因子間の相関の検討、の一連の統計分析を実施した。

研修の課題を検討するに際して、職業アイデンティティーという視点から考察するためには、

尺度として精査することが必要となるため、先行研究の実績に基づき、職業アイデンティティーの構造を明らかにすることを中心に行った。

【質問項目】

1. ホームヘルパーの仕事を長く続けたい
2. 私はホームヘルパーとして医師や看護婦から信頼されるようになる
3. 新聞やテレビのホームヘルパーに関する記事を気をつけてみるようになっている
4. ホームヘルパーの仕事は私に向いている
5. もう一度職業を選ぶとしたらまたホームヘルパーの仕事を選ぶ
6. 高校生にホームヘルパーになりたいと相談されたら勧める
7. ホームヘルパーの仕事を通して人間的に成長できる
8. 私はホームヘルパーの仲間から信頼されるようになる
9. ホームヘルパーの仕事を社会の人がもっと理解して高い評価を与えるべきだ
10. ホームヘルパーの仕事に誇りを持っている
11. ホームヘルパーの仕事は社会に役立つ仕事であるからもっと多くの人がなるべきだ
12. 私はホームヘルパーとして利用者やその家族から信頼されるようになる
13. 少し給料が安いとしてもホームヘルパーの仕事は良い仕事である
14. もっとホームヘルプサービスの勉強がしたい
15. ホームヘルパーの仕事を選んだことに満足している
16. ホームヘルパーは職業集団に属するべきである
17. ホームヘルパーによる社会的な事件が起こるととても気になる
18. ホームヘルパーとして仕事をすることに自信がある
19. もっとホームヘルパーとしての技術を磨きたい
20. 私の子どもがホームヘルパーになりたいと言ったら勧める
21. ホームヘルパーの仕事は私の能力を活かせる
22. ホームヘルプサービスに生き甲斐を感じる
23. ホームヘルパーは時間を割いてでも研修やセミナーに参加して勉強すべきだ
24. 利用者にもっとよいホームヘルプサービスを提供したい
25. ホームヘルパーは買ってでも介護関係の雑誌を読むべきである

III 調査結果

① 調査対象者の基本属性

[1級課程受講者]

回答者114名のうち、女性103名（90.3%）、男性11名（9.6%）であった。

また年齢層は、20代11名（9.7%）、30代18名（15.8%）、40代38名（33.3%）、50代39名（34.2%）、60代以上8名（7.0%）であった。

[2級課程受講者]

回答者154名のうち、女性132名（85.7%）、男性17名（11.0%）、不明5名（3.2%）であった。

また年齢層は、20代9名（5.8%）、30代26名（16.9%）、40代55名（35.7%）、50代50名（32.5%）、60代以上14名（9.0%）であった。

② ヘルパー活動経験

1級課程の回答者全員が、1年以上のホームヘルパーの活動経験を有しており、その内容は家事援助・身体介助、または身体介助のホームヘルプサービスであり、家事援助サービスのみを提供しているものはいなかった。

2級課程の回答者のうち、ヘルパー活動中は24名（15.6%）、休止中3名（1.9%）、未経験124名（80.5%）、不明3名（1.9%）であった。

③ 職業アイデンティティ尺度の因子分析

1級課程受講者の職業アイデンティティに関する設問25項目について、得られた回答を統計的に処理し、因子分析を試みた。検討の結果、因子抽出法は「重みなし最小二乗法」を採用した。

その後、斜交回転（プロマックス回転）を行い分散の合計値を算出し、その結果抽出後の負荷量平方和の累積%が50%をこえることを基準に因子数の決定を検討した。同時に因子のスクリープロットを参照した。

検討の結果、因子数を6とし、再度因子分析（重みなし最小二乗法による因子抽出・プロマックス回転）を実施し、因子パターンを確認した。（表1）

さらに、1級課程受講者の結果より検討した因子数を用いて、2級課程受講者の結果についても因子分析を行い、因子パターンを確認した。（表2）

④ 因子名の検討

因子名について検討の結果、第1因子を「ホームヘルパーとしての自尊感情」、第2因子を「職業への自己関与」、第3因子を「充足感・向上心」、第4因子を「職業規律」、第5因子を「ホームヘルプサービスに対する肯定的イメージ」、第6因子を「職業への帰属感」とした。

しかし、質問項目、因子数、因子構造については、さらに検証を重ねて精査する必要があり、今回の因子名を仮に設定するにとどめる。

【表1】1級受講者結果(パターン行列)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
項目 2	.698	-.329	.107	.003	-.002	.007
項目 4	.581	.387	-.143	-.009	-.110	.169
項目 8	.714	.008	-.151	.008	.006	.008
項目 12	.827	-.127	.008	.003	.004	-.120
項目 18	.843	.006	.005	-.004	.003	-.006
項目 21	.535	.228	.007	-.006	-.003	.007
項目 1	.125	.501	.289	-.149	-.002	.005
項目 5	.007	.535	-.007	.004	-.003	.254
項目 6	-.129	.733	.001	.008	.009	-.007
項目 13	.185	.624	-.008	.308	-.005	-.189
項目 20	-.378	.979	-.009	-.009	.002	-.007
項目 22	.163	.509	.188	.004	.009	.006
項目 14	.005	.002	.828	.008	-.108	-.010
項目 15	.004	.271	.541	-.008	.128	.001
項目 19	.002	.006	.740	-.003	.008	.008
項目 11	.207	.007	-.196	.614	.117	.005
項目 16	.240	-.006	.191	.482	-.003	.003
項目 23	-.003	.003	.154	.489	-.005	.420
項目 25	-.154	.006	.124	.589	-.005	.175
項目 9	-.001	-.001	-.119	.219	.720	-.006
項目 10	.224	.009	.009	-.126	.584	-.133
項目 24	-.001	.002	.424	.159	.616	-.105
項目 3	.008	-.005	-.008	.134	-.005	.669
項目 7	.001	.110	-.166	-.199	.499	.521
項目 17	-.174	-.150	.277	.114	.348	.620

因子抽出法：重み付最小二乗

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

7回の反復で回転が収束

【表2】2級受講者結果(パターン行列)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
項目2	.618	.181	-.001	.106	-.005	-.157
項目8	.839	-.001	-.005	-.002	-.001	.272
項目12	.737	-.001	-.002	-.132	.006	.008
項目1	-.002	.645	.267	.004	-.005	-.234
項目5	-.124	.800	-.000	-.009	.260	-.005
項目22	-.005	.607	.008	.232	-.002	.007
項目14	-.001	.004	.697	-.005	-.002	.004
項目15	-.009	.301	.508	-.228	.003	.229
項目19	.003	.005	.756	.002	-.128	.000
項目23	.007	.107	-.118	.564	-.007	.239
項目25	-.003	.007	.007	.646	-.007	.004
項目10	.139	-.006	.423	-.122	.741	.003
項目17	.002	-.182	.167	.159	.318	.650
項目3	-.102	-.002	.001	.375	.279	-.005
項目4	.226	.181	-.161	.006	.008	-.009
項目6	-.002	.185	-.176	-.118	.331	-.001
項目7	.103	.007	.390	-.007	.193	-.009
項目9	.197	-.147	.285	.189	.337	-.179
項目11	-.122	-.137	.221	.106	.167	.290
項目13	.010	-.004	-.006	.007	.005	.435
項目16	-.005	-.003	.202	.112	.002	.428
項目18	.152	.392	.007	-.003	-.003	.104
項目20	-.005	.113	-.010	.128	.335	.180
項目21	.261	.450	-.000	.007	-.103	.220
項目24	-.005	.005	.386	.131	-.166	.002

因子抽出法：重み付最小二乗

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

9回の反復で回転が収束

IV 考察

本研究では、看護、看護学生を対象とした同種の調査研究をもとに、質問項目を作成し、訪問介護員養成研修1級課程受講者の職業アイデンティティの因子構造を確認した。

波多野ら⁶⁾は看護師および看護学生を対象とした調査により、看護職アイデンティティ尺度として、①職業的自己関与、②職業への肯定的イメージ、③職業人としての自己向上、④職業人としての自尊、の4因子にわたる12項目を報告している。こうした看護職に関する先行研究結果と、今回確認した1級課程受講者の因子構造は、大きく異なるものではなかった。このことは、看護や介護といった直接的な対人ケア援助の専門職に共通する職業アイデンティティー、職業意識が形成される可能性を示唆するものと考えられる。

実際、訪問介護員養成研修や介護福祉士養成に看護師、保健師が講師、教員として関わっていることは珍しいことではない。また、介護は特定の職業が専有するものではなく、在宅高齢者、障害者の介護（介助）には、家族のインフォーマルな介護も含め、看護職、介護職等複数の職種の連携、協働が不可欠な場合も多い。

こうした現実に鑑みれば、「看護」と「介護」は隣接領域の職業として位置付けられ、特に在宅介護においては関係が深い。それらの共通基盤が明確化されることは、「協働」が求められる現場の実践にも有意義に作用すると期待される。

「協働」には、共通性と同時に、介護にかかわる各種の独自性、独立性が明確化されることも非常に重要な課題である。今回の調査により、職業アイデンティティ構造に看護職との共通性が見出すことができたが、介護の実践の場にあってホームヘルパーは主体的に独自の役割を果たすこと期待される。

専門職として確立するためには、従事者がその役割を自覚するとともに、態度、価値観、行動を内在化する経過が必要となる。職業に従事し、それを継続することを通して、職業アイデンティティを発達、深化する過程が大きな関わりを持つのである。その意味からも研修修了者がその後ホームヘルパーとして活動することの意義は大きいと考えられる。

介護保険制度の発足等の状況に牽引され、ホームヘルプサービスが今日のように社会的関心を集めるようにになった反面、ホームヘルパーの社会的地位、待遇が追いついていないという面がある。このことが、研修受講者をしてホームヘルプサービスに従事することを躊躇させる要因であることが考えられる。こうしたホームヘルプサービスをとりまく関連要因と、アイデンティティ達成因子や、獲得されたアイデンティティの保持、アイデンティティ得点の高低に関する検討を進めることが今後の課題である。

また、訪問介護員養成研修の諸相と職業アイデンティティの関連について検討するため、比較群として、2級課程の受講者合計154名に、同一の質問項目による調査を実施した。職業アイデンティティに関する得られた回答について、因子分析を試みた結果、明らかな因子構造を検証することはできなかった。（表2）

1級課程受講者の結果と比較した場合、2級課程受講者が研修を通して明確な職業アイデンティティを形成するに至らなかったことを示唆する結果であった。

1級課程と、2級課程では、研修内容、時間数に開きがある。ホームヘルパー養成研修カリキュラムでは、2級課程130時間、1級課程230時間（2級と併せて360時間）となっている。今回の調査対象では、週2回対面式講義、実技指導に通って受講する形態で、1級課程は約6ヶ月、2級課程で約4ヶ月の研修期間を要す。

また、1級受講者は原則として2級を終了しているものに限定される。

可能性の一つとして、職業アイデンティティの形成、獲得には、2級課程相当の期間では不十分である、ということが考えられる。基準的な看護師の養成期間が3年間、介護福祉士が2年間、であることを考えても、ホームヘルパーの養成期間は相対的に短期間であることが指摘できる。

では、1級課程の期間、時間数で受講者が職業意識、アイデンティティの獲得を成しているかと言えば、1級課程の受講者が既にホームヘルプ活動を経験している（ホームヘルパーとして働いている）ことを勘案しなくてはならないであろう。つまり、既に個人で差異はあるにしても、職業アイデンティティを確立している、あるいはしつつある者が対象となっている訳である。

訪問介護員（ホームヘルパー）養成研修については、その内容、時間数等に様々な課題が指摘されているが、最長の時間数、多岐にわたる研修内容を要する1級課程であっても、既にホームヘルパーである者が受講者であればこそ、職業アイデンティティに至っているという可能性が否定できない。

養成期間とアイデンティティ達成の関連については松下ら¹¹⁾が看護学生について、短大生・専門学生の方が、4年生大学生よりも同一性達成が高いことを報告している。これは、養成期間が長い4年制大学の場合、大学卒業後に臨床看護師の他、助産師、保健師、研究・教育職等の進路選択の可能性が開けており、在学中に習得した知識、技術を専門職として活かせる自己の可能性を追求する余地があるためと指摘されている。

准看護師を除き、看護師養成では、学生が養成期間前に職業としての看護師を経験していることはありえない。その点からも、1級課程訪問介護員養成研修では既に職業ヘルパー経験者を対象としていることは特徴的である。そのため相当に短期間での職業アイデンティティの達成が可能であると考える。そして研修終了後の選択肢をホームヘルパーに絞り込む、つまりヘルパーとしての同一性以外に選択の余地を持たせにくい研修と言えるのではないだろうか。

主として看護師養成の先行研究を参考に考察を行ったが、両者の養成のあり方の根本的な相違についてもさらに検討を進めなければならないであろう。ホームヘルパー養成研修自体が抱える課題の明確化、抜本的な改正の必要性も感じられた。

V 今後の課題

今回は因子分析により、職業アイデンティティの因子構造の確認を行ったが、さらに研究を進めるためには、今回用いた質問項目を尺度として精査することが必要となる。今後は、今回の結果によりいっそう仮定を明確化した上で検証的因子分析、複数回の調査による妥当性、信頼性の検討を行いたい。

その上で、ホームヘルパーの専門性と養成研修のあり方についてさらに考察を進め、専門職養成のための研修に必要とされる用件について明らかにしたい。

追記：本調査の実施に関しては、K市在宅福祉公社人材開発センターの多大なご理解とご協力を得て実施することができた。厚く御礼申し上げます。また、研究の途中経過について、第10回日本介護福祉学会において発表を行った。

[註・引用文献]

- 1) 平成15年1月9日、厚生労働省が支援費制度においてホームヘルプサービスに上限を設けることを検討している旨の表明があり、障害者団体による一連の抗議行動が起こった。マスコミでも翌日からこの問題は新聞記事や社説で取り上げられたが、概ね厚生労働省の主張に意義を呈し、障害者団体の抗議を支持する内容であった。
- 平成15年1月10日毎日新聞「行政が決めていた障害者福祉サービスを4月から障害者自身が選べるように改める『支援費制度』について、厚生労働省が身体・知的障害者受けるホームヘルプサービスの時間数などに『上限』を設ける検討を始めていることがわかった。・・・(略) ・・・制度導入目前の大きな方針転換に障害者団体は強く反発している。」
- 平成15年1月16日毎日新聞「〈障害者支援費上限〉身障者ら1000人が厚労省前で抗議」
- 平成15年1月16日読売新聞「障害者千人『ホームヘルプ補助金上限』に抗議行動」
- 平成15年1月23日毎日新聞社説「障害者支援費 厚労省は障害者の声を聞け」
- 平成15年1月24日朝日新聞社説「障害者支援費一地域福祉の名が泣く」
- 2) 岩田香織：訪問介護員の専門性に関する考察－訪問介護員養成研修受講生に対する介護意識調査を通して－. 日本女子大人間社会研究科紀要, 8:1-9 (2002)
- 3) 江田節子：歯科衛生士学科学生の学習への態度と職業意識に関する調査. 日本歯科衛生士会学術雑誌, 25 (2), 14-19 (1996)
- 4) 土屋友幸、高阪利美、山田ゆかり他：歯科衛生士専門学生における職業同一性について－同一学年での追跡調査－. 愛知学院大学私学雑誌, 31 (3), 307-312 (1997)
- 5) 鎌田みゆき、大塚真理子、長谷川真美他：看護学生の学習及び専門職業的態度に関する考察 (第2報). 埼玉県立衛生短期大学紀要, 16, 45-52 (1991)
- 6) 波多野梗子、小野寺杜紀：看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティーの変化. 日本看護研究学会雑誌, 16 (4), 21-28 (1993)
- 7) 阿部裕子、山田由子、松下由美子：看護学生の自尊感情及び職業同一性に対する臨床実習の影響. 日本看護研究学会雑誌, 20 (2), 64-65 (1997)
- 8) 園田雅代：女子大学生における自我同一性研究－理論的考察と実証的検証－. 玉川大学部紀要, 21, 319-368 (1980)
- 9) 中西信夫：職業の同一性地位に関する研究. 大阪大学人間科学部創設10周年記念論集, 395-453 (1983)
- 10) 中西信夫：職業の同一性を拡散した学生たちの背景. 青年心理, 49, 14-20 (1985)
- 11) 松下由美子、木村周：看護学生の職業同一性形成を規定する要因の検討. 教育相談研究, 31, 29-45 (1993)

(2004年11月4日受理)